

令和6年度修士論文

17世紀から19世紀後期におけるアイヌ民族の鯨類獲得方法 —文献史料の分析による捕鯨説・寄鯨利用説の再検証

樋口 凜太郎

要 旨

アイヌ民族が捕鯨を行ったか否かをめぐり議論は、日本に西洋の科学が取り入れられ始めた明治時代から続けられてきた。先行研究では、鯨類 (*Cetacea*) を捕獲したとする捕鯨説と、海岸に漂着した個体のみを利用したとする寄鯨利用説が主張された。捕鯨説の最も重要な根拠とされたのは、北海道帝国大学の名取武光が1940(昭和15)年に発表した『北海道噴火湾アイヌの捕鯨』である。同論文には、噴火湾沿岸のアイヌ古来によって語られた捕鯨の経験談が採録された。一方、江戸時代の文献史料からは寄鯨利用の記述が多く確認されたほか、捕鯨の存在を否定する記述までも発見された。いずれの説も十分な実証には至っておらず、先行研究の意見は一致をみていない。本研究は、こうした状況に再検証を促し、真にアイヌ民族の鯨類獲得方法はどのようなものであったかを明らかにするものである。

第1章では、『北海道噴火湾アイヌの捕鯨』に採録された経験談が歴史的事実であることを実証した。30年前・50年前・60年前と語られた3度におよぶ捕鯨の事例は、正確な実施年月日が不明とされてきた。これを特定するため、本研究では明治時代の新聞記事・公文書・私文書を調査した。結果、経験談と内容が類似する10件の文献史料を発見した。経験談と文献史料を照合し、互いが一致する箇所を確認した。発見された文献史料は経験談を裏づけるものであると判明し、捕鯨の実施年月日を1874(明治7)年6月13日・1878(明治11)年5月23日・1885(明治18)年7月9~10日だと特定した。

第2章では、17世紀から19世紀中期の文献史料を用いて捕鯨説の再検証を行った。文献史料調査の結果、捕鯨の記述が残る地域は千島列島・北海道東部・北海道噴火湾であった。捕鯨の記述から、千島アイヌによる氷海の割れ目を利用した捕鯨・北海道アイヌによる毒矢を利用した捕鯨・北海道アイヌによるイルカ漁の実態を復元的に考察した。北海道アイヌによる捕鯨の記述で鯨類を捕獲する場面が描かれないうのは、毒矢が鯨類に命中した時点で捕鯨を終了させていたことを反映している可能性を指摘した。

第3章では、17世紀から19世紀中期の文献史料を用いて寄鯨利用説の再検証を行った。文献史料調査の結果、“アイヌ民族は鯨類を捕獲する方法を持たない・寄鯨のみを利用する”とした記述には情報源の系統が存在した。流氷により寄鯨が多く漂着するとの言説を追究し、サハリン島・択捉島における寄鯨利用の実態を明らかにした。また、エビス信仰により捕鯨を忌避するという記述の多くが、和人地である松前周辺の風習を記したものであった。したがって、エビス信仰はアイヌによる捕鯨の存在を否定する根拠とはなり得ないと指摘した。

終章では、17世紀から19世紀後期のアイヌ民族による鯨類獲得方法を4種類提示した。先行研究において指摘されていた寄鯨を期待する捕鯨の事例を追加し、捕鯨と寄鯨利用が相反する行為ではなかったことを主張した。また、当該時期の記述が文献史料により矛盾しているのは、アイヌ民族の鯨類獲得方法に地域差があったことの証拠だと指摘して結論とした。